



病虫害防除情報



コバトン

令和6年6月26日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について

2 情報内容

(1) イネ縞葉枯病の病徴について

生育初期に感染すると、新葉が黄白色に退色し、こより状に巻いたまま弓状に徒長します。このような株は「ゆうれい」症状とも呼ばれ、分けつが少なく、枯死します。幼穂形成期以降の感染では出穂しないか、出穂しても出すくみ症状となり、これらの症状によって減収します。



縞状病斑とゆうれい症状



出すくみ穂

(2) 病原の特徴及び伝染

ヒメトビウンカが媒介する縞葉枯ウイルスによるウイルス病で、一度保毒したヒメトビウンカは死ぬまでウイルスを保毒するほか、卵を通じて次世代にも伝染します。麦類や畦畔雑草地で増殖したヒメトビウンカ第1世代保毒虫が、水田に移動してイネに感染させ、発病します。また、移植時期が6月中下旬のイネでは第2世代成虫が7月上旬頃から水田に飛来し、ウイルスを媒介します。感染・発病しやすい時期はイネの生育初期～幼穂形成期までで、その後は感染しにくくなります。

本県主要奨励品種のうち、本県育成の「彩のきずな」「彩のかがやき」は本病に抵抗性を持っていますが、「コシヒカリ」「キヌヒカリ」は罹病性です。特に、6月移植の「キヌヒカリ」は、本病感受性が高い時期であるため、ヒメトビウンカが

多発すると被害が大きくなる可能性があります。



ヒメトビウンカ 5 齢幼虫 (体長約 2mm)

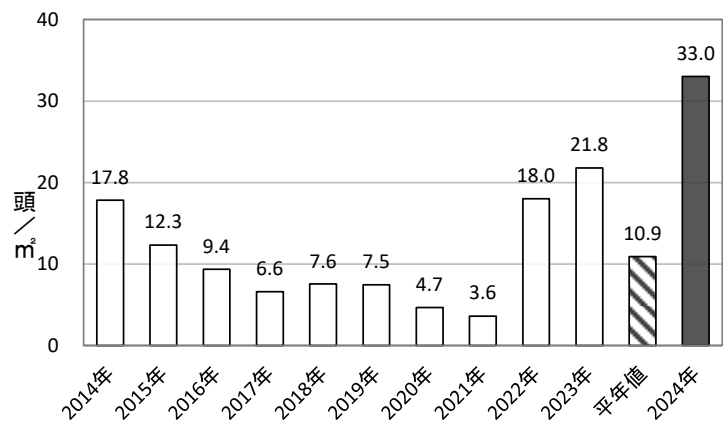


ヒメトビウンカ雌成虫 (全長約 4mm)

(3) ヒメトビウンカの発生状況

5月中旬に実施した麦類ほ場内でのヒメトビウンカの叩き出し調査の結果は33.0頭/m²で、過去10年で最も高い生息密度となりました(右図)。

6月中旬に実施した早期早植栽培の本田内のすくい取り調査(20回振り)の結果も平均



麦類ほ場内でのヒメトビウンカの叩き出し調査結果

虫数49.9頭と、昨年の平均虫数68.8頭に次ぐ本田生息密度となっています。本年は小麦の出穂が例年より遅く、麦刈り前に本田内すくい取りを実施した地区もあり、さらにヒメトビウンカの生育もやや遅れていたため、6月下旬以降の本田生息密度はかなり高まっていると予測されます。

(4) 防除対策

縞葉枯病は、発生してからの防除はできないので、媒介虫であるヒメトビウンカの防除が重要です。

また、ヒメトビウンカは黒すじ萎縮ウイルスも媒介し、2013年には「彩のかがやき」等で感染株が見られました。ヒメトビウンカ多発時は、縞葉枯病抵抗性品種であっても防除が必要となります。



黒すじ萎縮病によるわい化株

ヒメトビウンカを対象とする箱施薬を実施していない場合は、速やかに本田での薬剤防除を行いましょう。

表 ヒメトビウンカの本田防除薬剤例(地上散布及び無人航空機散布両対応)

薬 剤 名	IRAC コード※	使用時期	使用回数
スタークル1キロH粒剤	4A	収穫7日前まで	3回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫7日前まで	3回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫7日前まで	3回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫7日前まで	2回以内
キラップフロアブル	2B	収穫14日前まで	2回以内

(使用基準は令和6年6月25日現在)

※ IRACコード及びFRACコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和6年5月1日～8月31日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661